

## クレメンズの意識論と言語の文化背景

川 久 保      精      祐

Mark Twain の孤独論とアメリカニズムの中で論じた Huckleberry Finn に内在するアメリカ言語の原産地であろうと考えて来ました Huck 少年の意識からしてアメリカにおける素晴らしい可能性をその国の奥地性と荒野でもって語りかけるのが Huckleberry Finn の Lonesomeress と私は紀要第18巻1号（63年6月発行）で論じて来ました。今回は Huck 少年の自然への意識をもう少しつつ込んで論じ、更にアメリカ文化の理解に努めて見たいと思います。私が今から述べることは、これまでにどなたかが議論された点がいくつか在るかも知れませんが、その私的な修正と理解して頂ければ結構です。Marx の Clemens 評においても次のように言っている。

“To him the landscape, no matter how lonely, concealed a dangerous antagonist. He knew that nature had to be watched, resisted and—when possible—subdued.”

この事はやや奇妙な感じがするかも知れないが、他人に対して呪いをかける時によく用い、Huck 少年の自然界もまた、リヤ王の作品の中の呪いと共通する所が大いにある。勿論ジムはリヤ王のように chapter 24 の書き出しで、その場にふさわしい衣装をつけている様に思えるし、また、ジムがハックに23章の最後の方で、彼が感じた良心の呵責をハック少年に見せた後、かっとなって自分の娘をこれまでに虐待したことがあるかのようにずっと感じている。ジャク

ソン島での嵐や Huck 少年とジムが避難をするほら穴もまた、King Lear のそれと同じであり、そう思うと益々意味深い平行線をたどりさえする。リヤ王の中では荒地の中に成育するかん木が自然で、そこで Kent がこう語りかける一節でも明らかである。

“Since I was man, Such sheets of fire, such bursts of horrid thunder,  
Such groans of roaring wind and rain, I never Remember to have heard”

(III, ii, 45-48)

ハック少年の方言は、それと同じとはほとんど認めがたいが、彼の意味する所は同じであろう。次の一節からして私はそう考えたい。

Directly it begun to rain, and it rained like all fury, too, and I never see the wind blow so. It was one of these regular summer storms. It would get so dark that it looked all blue-black outside, and *lonely*.....and next, when it was just about the *bluest* and *blackest-fst!* It was as bright as glory.....dark as *sin* again in a second, and now you'd hear the thunder *let go* with an awful crash and then go rumbling, grumbling, tumbling down the sky towards the under side of the world....., (p.43)

明らかに、Kent を恐がらせるようなものがハック少年の血をわかせている。だがしかし精神的に作用する刺激は二人にとって、はげしい自然界の暴力、つまり power であり、その反応は全く同じものを感じることが出来る。それだけでなく、私達はジャクソン島でハック少年が体験からその知識を知り得たという事をまず頭に置いていなければならない。即ち彼はその時手を伸ばしてもっと魚を捕ろうとするし、ジムに向かって満足げに次のように言っている；

“I wouldn't want to be nowhere else but here,”

それに対しジムはそんな彼を傷つけまいと、次のように言っている；

“Well, you wouldn’t *a ben here*, ’f it hadn’d a ben for Jim. You’d a ben down dash in de woods widout any dinner, en gittn ’mos’ drowned, too, dat you would, honey.” (p.43)

第18巻第一号でも論じましたが、この Jim の方言は、とっぴな言語ではあるが、辺境奥地のくせであったと思われる。私が考えるに、新文化による修飾語の移入がなかったので、ある語をやたらと語尾変化させて概念の拡大を計っていると見る。だから意味なんかどうでもいいのである。面白、おかしく、唯それとなく分かればよいと言う表現である。

それから Huck 少年が大体あらしというものを自然の美しさと考えるようになるのは洞くつの持つ温かさと無味乾燥を知っているからであろう。話はややそれるかも知れませんが、King Lear の中にも、Huckleberry Finn の中にもあるように、“順応性のない人間は、かわいそうな動物である。一般に順応性のある人間は知的欲求が強いが、一方傷つきやすい、とも言っている。

私は Clemens が、Huckleberry Finn のいかなる部分も、あくまでもがんに King Lear と同じ描写をしていると言うつもりはありませんが、その戯曲が、彼が想像している Huck 少年の役割に多少影響を与えたかも知れないと私は思う。そして彼の想像力が、“lonesomeness” の概念である自然界に対する態度を作り出しているのである。そしてこの作品の中心的人物と、自然界とのかかわりが“lonesomeness” という暗示を作り出しているであろう。

現代に生きる私達は、Clemens が King Lear を読んだかどうかは分からない。然し Clemens が King Lear なるものを見たのは理解出来る。つまり1878年頃、ドイツ語の作品の中で、即ち3時間に渡る理解出来ない言語の中で、彼は雷と稲妻の光以外は何も理解しなかった事が分かる。

“His book is Shakespeare Dead? (1909)

彼は Shakespeare が書いたものも Bacon Francis (1561～1626) の文体も支持している。しかしいずれにしても Clemens が Shakespeare を見たのは確かであろう。

“equipped beyond every other man of his time with wisdom, erudition, imagination, capacious of mind, grace and majesty of experss,” と述べ、そして、

“will endure until the last sun goes down,” とも言っている。

アメリカの小説家であり劇作家の Robert Gale の Clemens 評によると、Clemens が “The Prince and the Pauper” の大がかりな準備をすすめている期間に、疑いもなく彼は Shakespeare を含めて、数多くのエリザベス王朝時代と、1603年～1625年の英国王 James 一世時代の劇作家達の作品を読んでいると主張している。この事からも、また他にも証拠は十分あると思われるが、Gale は “The Prince and the Pauper” に関しては、King Lear の影響を受けていると論じている。

——“The Prince and the Pauper and King Lear” Mark Twain Journal Spring 1983 (p.14)

Romeo and Juliet と Huckleberry Finn における Grangerford のエピソードとの間には類似性があるように思える。

Huckleberry Finn の21章は、Hamlet, Macbeth それに Richard 3 世等の会話の断片を組み合わせてみると、私達に the Duke の明らかに事実を曲げたひとりごとを読みとらせる事が出来る。従って私の思い過ぎかも知れないが、King Lear を取り上げることの誤りを感じない。即ち Huck と Jim のお互いの関係は、自然界に対する関係と言及出来よう。King Lear の中では、まるで人間社会が彼らの意に反した自然界によって作り出された最も重要な自己防衛の

形であるかのように、「宿なし男」という言葉が意味上，“homeless”で robeless だけでなく friendless man を暗示させている。

“lonesomeness”が文学上他のどんな種類の文学よりも優れていると仮定すると、「隔離」即ち「孤立」は最も悪い形の描写ということになる。つまり Lear は Cordelia を流刑にして悲劇的な罪を犯す。何故なら彼女の愛が、彼が生き残るには絶対に必要であったからである。唯 Lear がそれに気付くのは遅過ぎるのですけども。事実、彼女の愛ならば、彼を全てから守ったかも知れないし、身につける衣服と露をしのぐ家の必要性を捨てたかも知れない程に彼女の愛に懸命であった。King Lear は彼女の愛の力と必要性についに気づき、Cordelia に嘆願する次の一節もまた、Huckleberry の自然界に対する関係と極めて類似している。

Come let's away to prison;

We two alone will sing like birds i'th' cage;.....so we'll live, And pray, and sing, and tell old tales, and laugh, At gilded butterffies, and hear poor rogues. Talk of court news; and we'll talk with them too—— Who loses and who wins; who's in, who's out——and take upon's the mystery of things as if we were God's spies; and we'll wear out, In a wall'd prison, packs and sets of great ones, That ebb and flow by th' moon. (第5章 iii 8-18)

Lear が心に描く牧歌的人生は皮肉にも投獄の中での絶対的自由の一つである。Lear の人生の略図全体が Grangerfords からの Huck 少年の逃走と、Duke と King の侵略の間には、Huck と Jim のいかだの上の人生にとっても似ている。つまり短いが非のうちどころのない旅の広がりがあり、それを Huck は後になって、Lear の言葉で思い出している。即ち次の表現で少なくともそう断定してもよからう。

“and we a floating along, talking, and laughing” (p.167)

いわば、かごの中の二羽の鳥であるのだが、実際には、Huck と Jim は川の上で閉じ込められているという感覚に少しも注意を向けていない。二人は好き好んでいかだに頼っているのではない。無事にそこを逃れることが出来ないのであり、作品の最後になっても二人は戻れない、だが然し、自由といういかなる機会からもますます遠のき出して、下流に向けて、二人はのらりくり過すかの如く、流れに身をまかせることになる。

義務とか、目的のような全てのことを放棄し二人は川という“lonesomeness”を背景にして、仲良くもっと頼りになる種類の「自由」を選ぶ。即ちその自由を Lear もまた、Cordelia と共に待ちこがれている。言いかえると、二人は解放されて、時間と空間からしばらくの間、来世に生きているような感覚をもち始める。偉大な世界が衰退した流れるように満ちてくる、一方 Huck と Jim は潮の干満と戦う為にしばらく休む。

Lear の言葉を借りて次のように述べている。

“the mystery of things”:

“We had the sky, up there, all speckled with stars, and we used to lay on our backs and look up at them, and discuss about weather they was made, or only just happened——Jim he allowed they was made, but I allowed they happened.....” (p.97)

それから、King Lear と同様に Huckleberry Finn に於いても、生命は、特に他人の生命も大切にしている。確かにその中には Huck 少年の性格のペイソスがある。つまり彼は一人ではいることの出来ない社会からの逃亡者に似たものがある。彼が存在する所では何時も、自然界の“lonesomeness”が他人の不幸を喜ぶが如く Huck 少年に影響を与えている。第一節の上段にあるが、Widow の家で、彼の部屋の外では自然界が死のことを語りかけるし、死者達は自然界

を通して彼に近づこうとする。そして Huck 少年はそれに耳を傾けるよりはむしろ自分が死んだほうがましだとも考える。

木の葉と、ふくろうと、よたかと、犬と風の陰うつなコンサートの為に、彼は落胆し恐怖におののいている。

——“so down—hearted and scared, I did wish I had some company.”

この期待にまるで答えるかのように、仲間との慰めが Tom Sawyer の冒険という形で登場している。だがしかし、Huck 少年がジャクソン島で “independence” に向かって町を出るや否や、彼がかつて経験した古い難問にまた向くわす。

“When it was dark dark, I set by my camp fire smoking, and feeling pretty satisfied; but by and by it got sort of lonesome.....” (p.35)

Phelps 農場の中での一節にもあるように、ここでは、Huck 少年が人格をもたない形を採用している。——“it got.....lonesome.” 彼の環境と心の状態を述べるのに、形容詞を直ちに容認しているので理解しがたい。自分自身を励ます為に、Huck 少年は土手に腰を落ろし、打ち寄せる潮の流れに耳を傾けて、空と川をじっとみつめ、

“there ain’t no better way to put in time when you are lonesome,”

と彼は自然界の神の力を一時ではあるが、しっかりと信じる表明をしている；

“glides/Into [man’s] darker musings, with a mild/and healing sympathy,  
that steals away/Their sharpness are he is aware.”

私達は Clemens のロマン主義は何時も目にして来たし、既に知っているので

すが、Huckleberry Finn の中では、自然界の神のやさしく心をいやしてくれる思いやりが最後には人間という仲間にとって代わることになる。

一人ぼっちの3日間を過ぎて、Huck 少年は島で Jim を見つけてとても嬉しく思う。

“I was ever so glad to see Jim. I warn’t lonesome, now” (p.37-38)

“lonesomeness” が、Huck 少年を次に襲うのは、下流に向かって旅をしている途中 Jim との初めての別れが来る時である。即ち二人が霧と速い流れという自然の神に出逢った為の別れである。

“If you think it ain’t dismal and lonesome out in a fog that way, by yourself, in the night,”

Huck 少年は私達に次の事も暗示させている。

“you try it once—you’ll see. (p.68)

上記の第3節に彼が詳述したように、Huck 少年を襲うことになる最後の lonesomeness が Jim の裏切りであろう。King Lear 中の the Duke と King の関係もまた同じであろう。別れというのが最終的にはどうしようもない瞬間であり、ジャクソン島での別れ以来初めて、Huck 少年は自分が全く一人ぼっちである事に気付く。

Douglas 未亡人と Phelps 農場の一節にある lonesomeness の類似性はしばしば論じられているのだが、誰もその二節が、Huck 少年の親密な友情を Jim と結びつけている、と論じている読者はいないように私は思う。

即ち、Douglas 未亡人と Phelps 農場の一節より前部の方でその事が述べられていると論じる人もいれば、ジャクソン島での Jim との別れが Huck 少年の



lonesomeness を決定的なものにしていると論じている人もある。問題は Jim の存在が重要であるのか、あるいは Huck 少年の “lonesomeness” の欠如なのかのどちらかであろう。

ジムがハック少年に与えているものは、悲しそうに死について語りかける自然界の力からの避難である。私たちが一般に言う逃避である。作品はむしろ Huck 少年をその死の方向に追い立てさえする感がある。

孤立している周囲の景色の特徴が Huck 少年にとっては、“lonesomeness” なのである。Jim には自然界の力を変える能力など全くありはしない。言うなれば、自然界の “lonesomeness” だけが川の上ではっきりと感じられるのであり、むしろ水上から離れようとさえしない。言い換えると、Clemens が彼自身の言葉で “enchanting” and “haunting” と述べているのだが、川の流れとの恐ろしいまでの静けさの中で、また倦怠感と眠さの中で、そしてそれら諸々の影響の中で、死と妖精の関係をはっきりと触知している。

しかしジムとの仲間意識は Huck 少年の自然界との辛い体験を、丁度ジャクソン島のほら穴で嵐を “lonely” と思わせたように、恵み深いものではないが自然界の呪いの中で「素晴らしい」と思わせている。Huck 少年自身にとってではなくて、何かに害を影ぼすほどの自然界の力に興奮している。洞穴の中や、川の上では自然界の力に恐れをなしていたが、しかしその事に美しささえもそえるのは真に危険がなくなってからである。もっと正確に言うと、当面の危険から解放され自由になった時、Huck 少年は自然の呪いの中に美しささえ見るのである。しかもその自然の呪いが、その場にずっと存在し続けてはいるというのに、そしてその川にいと、Huck 少年にとって未亡人の家での、また Phelps farm にいる頃を感じていたのと同じ孤独感が心の中で湧き上がってくる。しかしそれはまるで、“Life on the Mississippi” における旅人の様であり、彼は深い孤独と心細さがたれこめている広々とした川に愛着さえ覚えるように感じる。そしてその場面では、明らかに Huck 少年は孤独ではない。何故なら Jim が一緒にいるからであろう。Jim がいると Huck 少年は少しも孤独にならないのである。彼にとってそのことはとても気持ちが安らぐのです。言い換える

と、“lonesomeness”が自然界の中で美的めい想の対象になっているのです。若し私がその事を強く主張しないならば、同じことを研究されている先生方には、「もし死というものをぼんやりとした魅惑のものと考えなければ」、ジムの友情意識が作り出す安心感によって、死の恐怖が Huck 少年には全くなかったと考えられてしまうからである。

Huck 少年は“lonesomeness”であるが、寂しくは思っていない、という事が矛盾した説であるならば、死というものもまた人間が行き尽く共通の経験という事にはならない。いろいろな時に私たち人間は、たとえ絶対避けることが出来ない恐怖にさらされたとしても、魔よけもなく、憂うつな孤独な時間を公然と受け入れてしまうに違いありません。即ち、Huck 少年のように、私達多くの人間は思いもよらぬ矛盾した孤独な状態の中では、即座に矛盾した行動をとっているであろう。Huck 少年の時代も、確かに逆説がゆえに魅力ある人生になっている。複雑な畏敬の念や、恐怖や、喜びの中で彼自身、“subline”として、安全な状態から矛盾を認めているのです。

従って私達は、“Huckleberry Finn”の中で、自然界の美しさと、恐怖という矛盾だけでなく、「美と恐怖」を「美」と言う哲学的な分離状態として見る事が出来る。人々にその恐怖の美しさも言葉でなんとか表わそうとした、と結論づけてよかろう。

人間社会への反応として、あるいは自然界や人間性の独特な心理現象として Huck 少年の“lonesomeness”を扱った論評はありますが、しかし私は、Huck 少年は彼を拒んでいる社会から遠ざけられているかも知れないし、しかも拒ばれている彼自身もその事を“lonesomeness”と呼ぶ雰囲気が事実存在している事を主張したい。私はこの事を自然界への反応として論じようとして来ました。おそらく“lonesomeness”の底にあるものは、自然界の未来には「死」という形があり、その死が現実を支配している、と論じたい。この描写と動機は、川の流れを“lonesomeness”の描写に結びつけている所です。つまり Huck 少年は、一人でいる時にはたいてい死にたくなる程であったのだが、Jim と一緒にいると、正にそんな死ぬ思いの中でも心暖まる気分になれるのである。

Tom Sawyer, Aunt Sally, the Widow, そして Huck 少年の仲間のどの人物をとってみても“lonesomeness”を消滅させる大きな要因となっていることに気付きます。

しかし他とやや異論をとなえたとすれば、ジムだけが“lonesomeness”を一つの美にすることが出来る点です。おそらくそれは Jim だけが Huck 少年を束縛しようとしなからであろう。唯しかし Jim は Huck 少年に心からの友情を要求している。というのは Huckleberry Finn の中の一般的に荒涼とした自然界では絶対に“love”が必要であり、“King Lear”の“love”と同じように力強さが感じられる。両方の作品の中で、時々“love”というものが“lonesomeness”に抵抗しているだけでなく、極めてはげしい自然界の強襲に対しても抵抗しているのがよく表わされている。

Huck 少年と Jim が初めていかだに乗りこむ時に、二人はほら穴の中で二人が助け合った思いに浸っている。次のような表現でその事が立証される。

“snug wigwam to get under in blazing weather and rainy” (p.54~55)

この事は二人の最高のきずなとなる避難所があるからであろう。

また荒れ狂う嵐の中で二人の新しい仲間意識が土地の人の小屋を奪うことになる。恐ろしいまでの自然界の力の中で、ジャクソン島にいる時と同じように、再び自然の美しさが表現されている。

Huck 少年は私たち読者に、刻々としのび寄る恐怖を感じさせることによって、一種の読者いじめをしているように思えるけれども、つまり、打ち寄せる波が彼を川に落とし込むという事、彼が水中にほうり出される時彼にとって唯一の脅威は、Jim が彼をあざけり笑いながら死ぬかも知れないという思いである。しかし、二人の安全は当分の間二人の仲間意識がゆえに、つまり“love”と同程度の固いものとなる。(p.104)

しかしながら不運にも、“love”なるものが、Huck 少年の“civilized” world に対しての嫌悪感に打ち勝つことは出来ないように思える。Jim はその世界を

受け入れるのに、Huck 少年の方は追従しない。でもただ言えることは、この作品の最も悲しい瞬間である。“Territory”に向かって逃げ出す決心をしているという事です。

Huck 少年は自立を失わないように努めるが、再び孤立に身をゆだねる事になる。即ち、自然界の神の呪いと、特に、“lonesomeness”に対する彼の弱点を見せつけている。一方 Clemens の“lonesomeness”についてもう少し別の観点から論じてみると、つまり、「言語と文化は表裏一体」という点を柱とした考え方を基準にすると、私達日本人の言語表現は自己文化の価値観、規範の影響を強く受けたものであるが故に Clemens の“lonesomeness”表現も彼の言語表現をより深く理解しなければ、その話者を理解する事が困難であるし、その話者の背景としてもつ文化を理解することは非常に困難である。私は今その問題に苦慮している。然し、Huck 少年には「解放か拘束かの二者択一の関係しかない」、文化背景を考える時に、最後に Huck 少年にとっての「自由」という側面からこの作品を見て結論づけたいと思うし、彼の日常的な文化を見てみたい。例えば彼が外的な支配を受けないとしても「彼はあまり自由ではなかったであろう」という事です。この作品の中で中心的論題は、つまり Huckleberry Finn にとって欠くことの出来ないものは、「自由」であろう。だから私は、“lonesomeness”の議論があって初めて、その「自由」を理解させてくれる、という考え方を否定出来ないのです。即ち私の考えでは、この作品の中で、“freedom”とは、社会からの自由であり、その事が彼にとって絶対必要なのです。この論点を明確にさせないでは、私たちは、Huckleberry Finn が私達読者に提供している少なくとも三つの種類の異なった「自由」について論じることとは出来ないと思う。さてそれらの「自由」とは、一方では「束縛」からの自由で、他方では、「残酷さ」からの自由、即ちそれは、Miss Watson のやり方と、父親からの自由であろう。そこで彼は、自由の類は違ってはいたが、奴隷という法的立場からの自由を求めている Jim に出逢う。

人々が島中を捜しに来る時には、Huck 少年の自由は、Jim の自由と同じくらい大変な危険にさらされている。何故なら、もし発見されたら the Widow が、

あるいは父親の監禁にむりやり連れ戻されるのは疑いもない事であったからです。

“They’re after us!” Huck shouts. (p.53)

それは身元を知られるという心配ではなくて、お互いに持っている同情からの自由である。

彼と Jim は力を合わせて川を下り始める。しかし、二人の思いは同じに思えるが、真に同一ではない。最後の章でこの点を二度述べている。二人が、いかに乗り合わせて Phelps farm からの救助にあった時の複雑な気持ちを Huck 少年は次の様に大声でどなっている。

“Now Old Jim, you’re a free man again, and I bet you won’t ever be a slave no more!” (p.212)

しかし彼の興奮の中で、Huck 少年は Jim の自由と自分の自由とをここで混同していると思われる。と言うのは、Jim は法的感覚での自由な人間に一度もなった事がなかったからである。その皮肉がすぐに事を転倒させている。そして一枚の紙切れが Jim に遂いに「自由」を与える時、Aunt Sally は Huck 少年から再び自由を取り上げる事を脅迫する。Huck 少年の人生に対する欲望は、Jim の願望のように、永久に残酷さと、束縛からの自由であるのだが、然しそれは際限がないように思う。時代と文化背景を考える時に、事実終らないのは当然であろう。

今もし、Huck 少年と Jim が旅を始めて、二つの異なった自由を自分達のものにして旅が終るとすれば、二人は途中で共通な三つ目の自由をも発見したであろうからです。次の表現からその事が推測出来る。

“You feel mighty free and easy and comfortable on a raft,” says Huck, the moment he and Jim shove off from the Grangerfords.’ (p.95);

そして後に、二人の関係がしばらくの間、“the Duke and King”なるものを読者に想像させたように思え、Huck 少年は彼の希望を失わせないように私達読者に次の事を言う余裕さえあったように思える。

“.....it did seem so good to be free again and all by ourselves on the big river and nobody to bother us.” (p.161)

the Grangerfords と the Duke and King の両者共に、至着して最初の2～3日間の自由には共通するところがあるように思える。その数日間の自由は、Huck も Jim も気付くことのない自由である。しかも二人がこれまでに分かち合った自由でもある。それは監禁の中で達成した自由であり、相手を思いやりながらの孤独の自由でもある。

奇妙なやり方で述べられてはいるが、それはまた、自然界の呪いからの自由でもある。そしてその事を Clemens は、自然界の神の代弁として、事実次のように言いさえもしている。

“the freedom to see beauty in nature’s entire aspect, even in terrors, even in “lonesomeness”.

本来“freedom”は“lonesomeness”ではないかも知れないが、この作品は、冒険の旅を一つの成功に収めている。Huck 少年の自由は長続きはしないが、彼はとてもしこうなので、その自由を取り戻す為に一人で川へ引き返すことをしない。またその“freedom”が、この作品の中で正にその最高に素晴らしい論点である、と私は思う。そしてその事が私達人間がこの宇宙で求める原点であろう。この時代を考え合わせると、私はこの Clemens の作品の中にこそアメリカニズムの原点があり、「自由」を全ての中で最も大切なものとして、Pilgrims の時代からずっと、今日のアメリカ人の価値観の中で、自由こそ最も重要なものである、とするアメリカ文化の原点がここにあるように思えてなら

ない。自由こそアメリカ国民の心の古里とするアメリカ文化の発展に Clemens の作品が大いに影響を与えていると言っても過言ではなかろう。自由で豊かな人類の未来を常に求めているアメリカ国民の文化の象徴でもあろう。多種多様な文化が存在しているアメリカを真に理解する為にも、Clemens のいくつかの作品は欠かす事が出来ない。彼の作品の中には、その人々の行動パターン、他の人々に対して取る態度や、その基になる価値観、種々の状況での独特な考え方と行動、その中でどのように問題対処としての表現が成されているか、そして人々のマナー等、生活に密着した当時の人間の日常的文化や “culture specific” とも言えるものが理解出来る。

また難しいが、Clemens 独特の言語表現から、異文化に於ける、コミュニケーション・ストラテジーを垣間見ることが出来る。その全体像を見定めることは困難であるが、アメリカ文化の一端を発見し、アメリカ人の根源的な世界観や人間観までイメージとして浮んで来る人もあろう。「人間にとってふさわしい研究は人間である」 “The proper study of mankind is man” と18世紀のイギリスの代表的詩人、アレキサンダー・ポープが言っているが、Clemens の人間観も言葉にどう反映させているかという推論が当時のアメリカ国民の文化の特色を見つける最も有力な標識となろう。私がこのように考える根拠は次のような参考資料からである。異質な人間観を持たれる研究者があれば是非御教示願います。私のこの研究は “Comparative” 文化的発想と言うよりも、むしろ Clemens 一人の個別文化の固有の価値観に着目した “contrastive” 文化の発想であった事を最後に述べて結論と致します。

#### 〔資 料〕

“Mark Twain Confronts the Shakespeareans”

“The Prince and the Pauper and King Lear”

“Modern Language Quarterly, No. 3. (Sept. 1983)

“American Literature, Volume 53. No. 2. May 1987 Copyright.